OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

古本と自動車

榊耿平

訪客　四十歳位。實業家
主人——三十五歳位。教師

客——先生は消費組合などの御研究もなされて居られますか。

主——別にやつて居りません。が色々學者の研究を見ますと仲々大きな問題の様ですね。

客——あなたの學校などでも、例へば購買組合と言つた様な組織がありますか。

主——それはあります。どこの學校にでもそれはある様ですが、餘り發達してはゐない様です。色々の原因はあるのでせうがね。

先達或る若い教師に會ひましたら、賣買の第六感とかいふ偉らさうな事と云つてゐました

客——何ですか其の第六感とは。

主——その男の話では、特に學校の様な所では購買組合などは發達しないと言ふのです。その理由は、寄宿舍なんて言ふものは高野山と同じ所だから學生は一般に市中の雰圍氣に憧がれてる。而も組合は一つの機械の如く、無味乾燥で甘味辛味も何もない。所がこの男の意見では、賣り買ひと言ふものも一つの自己表現まあ藝術の様なものだと云ふのですつまり、單に必要な物的要求を滿足する以上に、もつと外の關係、つまり第六感が働くと云ふのです。買手と賣手とが向ひ合つて醸される情景の中に或る滿足を覺えるのがそれださうです尤もその男は餘り學問などやりさうもない出鱈目な人間ですから何言ふてるのか解りませんがね。

客——然し夫れはやはり一つの觀方ではありませう

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

な。販賣心理とか何とか近頃やかましく言はれるのも其の邊ぢやありますまいか。所でですね。學校の様な場所の組合をも少し意味あるものとするために學生の金融機關としたらどうです。と申すのは學生の古本賣買の媒介をするとか……

主――いやそれはやつてる様です。所々の學校で試みてる様ですが、之も思はしくない様です。

客――何故でせう。

主――こう云ふ事がありましたよ。私共の學生の時分AB と云ふ二人の學生が寄宿舍で隣同志だつたのです。Aが金に困つて法律書を古本屋に賣拂つたんです。それから二日ばかりしてBの室に話に行き、不圖机の上を見ると自分が賣つたのと非常によく似てる本がある。そこで何氣なく夫れはどうしたんだいときくと昨日古本屋から買つてきたんだと云ふ話。Aが手にとつて見ると紛ふかたなき先に自分が賣つた本だつたんです。で幾らだときくと是々だつたと言ふ。それはAが受取つた金に比べて遙に大きなものだつたさうでAは滑稽でもあり、馬鹿らしくもあり、實はこうだと打開けて大笑ひしたんだそうです。

客――成程。それなら一層のこと組合が媒介すればよいぢやありませんか。

主――そこですが。金の入用なのは大抵急迫な場合なのですが、組合に頼んで賣つて貰ふのでは急の間に合ひません。賣れるまで棚露しなのです。で私の考へでは學校の圖書館の資金を以て學生の賣らんとする本を買上げるのが最も良策です。圖書館は同じ本が何冊あつたつて構ひません。寧ろ多い程いゝのです。一人の人が借出してしまへば他の人は見られない様に、一冊より藏書のない圖書館は不便ですよ。

客――成程。面白い方法だと思ひますな。

◇

客――小鳥の値段が大變下つたさうですな。

主――さうですか。あなたも損をしましたか。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

客——いや別に。

主——大部以前、まだ小鳥の景氣の良かつた時分、或る人が見えまして、こんなに投機的になつては何か取締が必要ちやないかと申しました私は其の時、まあ放つて置くのが一番いゝだらうと申しましたよ。

客——然し小鳥稅とか何とかの事も聞いてたりますが。

主——あれも危かしいものだらうと思ひます。そんな事の費用と時間があつたら、差當り下水の改良でもするんですね。町に漂ふてる一種言ふべからざる臭氣は、公園や屋島と共に特筆する値がありますよ。

尤も或る人の歌に「山里は松の聲のみ聞き馴れて、風吹かぬ日は寂しかりけり」とありますから、臭ひせぬ日は淋しかりけりかも知れません。

客——隨分痛撃ですな。

主——あなたなんぞも少し寄附でもされて町の改良でもなされたらどうです。

客——どうも私までやられてしまつて今日は風向きがいけませんな。

主——所で小鳥ですが、放つておけば値が下るのは見透いてるんですからね。學問の言葉で需要供給の原則と言ふのです。あなたの息子さんも學校に御出でゞしたな。聞いて御覽なさい。

客——然し、或る人間が、うまく當つてぼろい儲けをすれば、自然多數の人間がそれに走るだらうし、その結果は道德上又社會上面白からぬことが……

主——そんな事は一向に構はんです。或る人がうまく當つて濡れ手で粟の儲けをしたと云つてもそんな人はほんの僅かです。吾々は、そういふ機會をつかんで其の人の賢明さに敬服すべきですよ。儲けたからつて羨む必要はないのです。いけないのは、その尻馬に乘つた連中で、そんなのは、ちやんと値下落によつて罰をうけるのですから、之で世の中も仲々味をやるもんです。

客——それでは先生は、放つて置いたら何でも都合

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

よく行くとお仰るのですか。

主――そうぢやありません。反對に、或る場合には積極的國家の政策を大いに仰望するものです唯小鳥など云ふ小問題には、そんな必要がないと云ふのです。

社會政策と云ふことが言はれますが、近頃或る雜誌をみると英國の事情が紹介されてありました。それに就て思ひ出すのは自動車の事です。

之は餘計な話ですが、私に解らぬ事は、狹い路などで、後ろからきた自動車や自轉車が、無遠慮なラッパ一つで通行人を道路端にすくませ揚々として走りすぎる事です。どう考へても之は解りません。唯それが便宜だからなのでせうが不自然な事だと思ひます。

客――大部以前の有名な雜誌にも「自動車横行時代」とかの號があつた樣ですね。然し、それは自動車が惡いのでなくて町の組立、つまり道路が惡るいのでせう。

主――尤もです。がどうもいゝ氣持は致しませんな。と之は餘談です。さつきの雜誌にこんなことが書いてありました。英國の話ですが、昔は金持でも箱馬車で出かけたから人々も日に一遍位見かけるに過ぎなかつたが、近頃は自動車なものだから、同一人を日に六遍も見る。それが同一人と解らずに皆別人だと思はれるから、金持の人數、その富の高などに關して人々に誤解を與へると云ふのです。所が近頃は自動自轉車やライト、カアが出來、勞働者も求められるから、次第に階級的差別感が失はれつゝありと云つて居ります。

客――一圓均一のタクシーの流行なども、そんな風にも觀られますね。

主――その雜誌の筆者は、こうゆふ外觀上の階級的接近はその根底に橫はる貧富の差の接近によるのだと考へ、そして此の根本の接近は社會政策の效果だと主張するのですが、私には問題は未だ殘つて居る樣です。

客――と申すと？

主――つまり階級鬪爭が、物質的享受の不平等だけ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

に止らず、支配、被支配と云ふ様な人間心理にまで立入つてると思ふのですよ。ギルド社會主義と云はれるもの、強味もそんな所に在るぢやないかと思ふのです。

がこんな話は又にしませう。

客――愉快でした。又お目にかゝります。

主――さよなら。

列國の國富　内閣統計局

各國の國富を見るに、最多額なるは北米合衆國の六千四百參拾五億圓で、英吉利の壹千七百八拾貳億圓、佛蘭西の壹千參百五拾八億圓、之に亞き我國の八百六拾壹億圓に第四位に當る。之を人口一人當りに觀るに第一位は北米合衆國の五千八百九拾壹圓で、玖馬の五千五百五拾參圓、加奈陀の四千九百八拾五圓等之に亞ぎ我國は僅かに壹千五百參拾八圓に過ぎない。

國名	大正十一年	大正元年	人口一人當り比較	增減
帝國	×八六、〇七七（百万円）	※三一、〇四三（百万円）	一、五三八（円）	二六九
北米合衆國	六四三、五二二	三七、七一六	五、八九二	一七三
英吉利	一七八、三一三	一五九、〇五〇	三、七五二	一一三
佛蘭西	一三五、八三六（百万円）	二四、四九二（百万円）	三、四五一（円）	一九
獨逸	七一、六一四	一五六、〇三三	一、一五四	四六
西班牙	五八、八一四		二、七三五	
加奈陀	四四、三三三	三一、〇〇八	四、九八八	一〇一
英領印度	四四、〇五二		一三八	
支那	三八、二八九		一〇一	
波蘭	三四、一〇三		一、一五四	
亞爾然丁	二六、四三五	三三、四三〇	三、〇五九	一三
伯剌西爾	二六、一一八		八五三	
濠洲	一九、四三六	三一、二六三	三、四五〇	一五八
和蘭	一八、五七〇	九、六八三	二、六二〇	一九三
玖馬	一六、〇四八		五、五五三	
墨西哥	一五、八四七		一、一三	
瑞西	九、一六一	六、〇七八	二、三五四	一五〇
秘露	八、〇三四		一、四四六	
芬蘭	七、一三三		二、三三六	
智利	六、一四六		一、〇二七	
新西蘭	五、五三		二、七八四	
ラトヴィア	二、〇〇六		一、二五七	

×大正八年　※大正二年　（列國々勢要覽より）